The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新出土資料関係文献提要（八）
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2006, 42, p. 47-58
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60973
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　結号（総四十二号）平成十八年十二月　四七―五八頁

新出土資料関係文献提要（八）

草野友子

本提要は、『中国研究集刊』三十八号に掲載された「新出土資料関係文献提要（七）」の続編である。前回同様、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）・上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）に関する文献を主対象とした。

『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』（馬承源主編、上海古籍出版社、二〇〇五年十二月、三二九頁、縦組繁体字）

上博楚簡の図版（写真版）と釈文とを収録した書の第五分冊（第一分冊・第二分冊は提要（一）、第三分冊は提要（四）、第四分冊は提要（六）で解説済み）。本巻は、『競建内之』・『鮑叔牙与隰朋之諫』・『季庚子問於孔子』・『姑成家父』・『君子為礼』・『弟子問』・『三徳』・『鬼神之明　融師有成氏』の八篇を収録している。「図版」（写真版）と「釈文考釈」との二部よりなる。

『競建内之』の釈文担当者は陳佩芬氏である。十簡からなり、篇題は第一簡背面に「競建内之」とある。竹簡の形制は『鮑叔牙与隰朋之諫』とほぼ同じ。本篇は、日食時における斉の桓公と鮑叔牙・隰朋との対話を記述している。隰朋と鮑叔牙とに関する事は、史書に多く記載されているが、本篇の内容はそれらには見られないものである。

『鮑叔牙与隰朋之諫』の釈文担当者は陳佩芬氏である。九簡からなり、第九簡に篇題がある。本篇は、鮑叔牙・隰朋の二大夫が斉の桓公に直諫する内容である。竹簡の形制は『競建内之』とほぼ同じであり、これら二篇を同一の篇とする研究者もいる。形制面と内容面からは同一

篇と見ることは可能であるが、書写・筆画が違うことが大きな障害であり、今後の研究動向を見逃せない文献である。

『季庚子問於孔子』の釈文担当者は、濮茅左氏である。二十三簡からなり、篇題は無く、冒頭の「季庚子問於孔子」より取る。その内容は、季康子と孔子とが、国の統治について問答するというものであり、孔子の政治論が窺える。

『姑成家父』の釈文担当者は李朝遠氏である。十簡からなり、篇題は無く、冒頭の「姑成家父」より取る。本篇は、春秋中期の晋国の三郤（郤錡・郤犨・郤至）に関係するものである。その内容は、『左伝』・『国語』などの文献と相違があり、本篇の基本的立場は三郤に同情しているようである。

『君子為礼』の釈文担当者は、張光裕氏である。十六簡からなり、篇題は、第一簡の「君子為豊（礼）」の句より取る。全体的に竹簡の残欠が多い。本篇の多くは孔子と弟子との間の問答に関するものである。文中に登場する人物は、孔子・顔淵・子羽・子貢・子産・舜・禹らである。前半部は孔子と顔淵との「礼」と「仁」の関係についての問答、後半部は子羽と子貢とが、孔子と子産のどちらが賢人であるかという内容の問答を行っている。また、第十六簡には「子治詩書」との記述が見られ、「六経」の成立に関わる記事である可能性がある。『君子為礼』と『弟子問』の一部とは連続する可能性があるが、竹簡の多くが欠損しているため、竹簡の形制から判断することは困難である。

『弟子問』の釈文担当者は、張光裕氏である。二十五簡からなり、篇題は無く、整理者によって名付けられた。全て残簡であり、それぞれの簡が連続しているとは言い難い。本篇は、孔子と弟子との応対問答に関わる内容である。孔子と宰我・顔淵、顔淵と子由、及び子羽と子貢との問答等を含み、その内容は多様である。また、附簡は、『論語』学而の「巧言令色、鮮矣仁」に相当すると見られ、注目に値する。

『三徳』の釈文担当者は李零氏である。二十二簡からなり、別に一簡がある（香港中文大学中国文化研究所文物館所蔵。これを附簡とする）。篇題は無く、『大戴礼記』四代と類似する一文があることから、整理者によって「三徳」と名づけられた。その内容は、「天」・「地」・「人（民）」に関するものである。本篇における「天」と「人」との関係は、典型的な天人相関であり、人為が「天」に感応し、「天」が人為に応じた禍福を降すという思想が見られる。また、人格神として上天・上帝が位置づけられてい

る点は、注目すべき点である。

『鬼神之明　融師有成氏』の釈文担当者は曹錦炎氏である。八簡からなる。篇題は無く、『鬼神之明』は整理者が内容に基づいて名付けたもの、『融師有成氏』は冒頭五字より取ったものである。第五簡の墨節によって、『鬼神之明』と『融師有成氏』とを分けている。『鬼神之明』は、『墨子』の佚文の可能性がある。『融師有成氏』は、上古の伝説上の人物の故事や夏・商の歴史に関わる内容を叙述している。

なお、『上海博物館蔵戦国楚竹書』は当初、全六冊で刊行されるとのことであったが、最新の情報によれば、全九冊程度となり、さらに別冊が加わるとのことである。この点については、本誌四十一号掲載の戦国楚簡研究会「中国湖南省長沙学術調査報告」参照。

『古代思想史と郭店楚簡』（浅野裕一編、汲古書院、二〇〇五年十一月、三八六頁、縦組和文）

郭店楚簡について、中国哲学研究と中国古文字学研究の専門家からなる「戦国楚簡研究会」による共同研究の成果をまとめた書。

本書は、郭店楚簡に関する論考十六篇を収録する。第一部「総論」、第二部「思想史研究」、第三部「古文字学研究」の三部構成である。

第一部「総論」の第一章「戦国楚簡と古代中国思想史の再検討」（浅野裕一）では、戦国楚簡を取り扱う意義を明らかにし、戦国楚簡研究が中国古代思想史研究にいかなる再検討を迫るかについて概説している。

第二部「思想史研究」は十二章からなり、文献の性格、伝世文献との比較、文献の思想的な特色等についての論考をそれぞれ掲載する。また、『春秋』の成立時期についての論考がある。各章の題目は以下の通り。第一章「『六徳』の全体構造と著作意図」（湯浅邦弘）、第二章「郭店楚簡『緇衣』の思想史的意義」（浅野裕一）、第三章「『窮達以時』の「天人の分」について」（浅野裕一）、第四章「『唐虞之道』の著作意図―禅譲と血縁相続をめぐって―」（浅野裕一）、第五章「『魯穆公問子思』における「忠臣」の思想」（湯浅邦弘）、第六章「『尊徳義』における理想的統治」（菅本大二）、第七章「郭店楚簡『性自命出』と上博楚簡『性情論』との関係」（竹田健二）、第八章「郭店楚簡『性自命出』・上博楚簡『性情論』の性説」（竹田健二）、第九章「『五行篇』の成立事情―郭店写本と馬王堆写本の比較―」（浅野裕一）、第十章「『春秋』の成立

時期―平勢説の再検討―」（浅野裕一）、第十一章「『太一生水』と『老子』の道」（浅野裕一）、第十二章「『語叢』（一・二・三）の文献的性格」（福田哲之）。

第三部「古文字学研究」は、三章からなり、竹簡の分類と排列から『語叢三』を再検討したもの、戦国簡牘文字における二つの様式について検討したもの、楚墓出土簡牘文字における位相を検討したものを掲載する。各章の題目は以下の通り。第一章「『語叢三』の再検討―竹簡の分類と排列―」（福田哲之）、第二章「戦国簡牘文字における二様式」（福田哲之）、第三章「楚墓出土簡牘文字における位相」（福田哲之）。

本書に収録されているいずれの論考も、他の学術雑誌に既出の論文を再編したものであり、初出については巻末に「初出誌一覧」としてまとめられている。

「序文」において浅野裕一氏は、中国・台湾・欧米の学界は、戦国楚簡に関する数多くの研究成果を発表しているにも関わらず、日本の学界では研究者自体が極めて少ないことを指摘する。本書は、日本の戦国楚簡研究が海外から後れを取っている状況の打開に役に立ちたいとの思いで執筆されたものである。

また、「あとがき」において湯浅邦弘氏は、戦国楚簡研究会の足跡と現状を述べる。これを見ると、本研究会が盛んに研究会合を行っていること、国内外の学会に積極的に参加していること、数々の刊行物を発行していること、さらに実際に現地調査を行っていることがわかり、その活動範囲の広さと積極性は、今後の戦国楚簡研究の活性化に一役買っていることは間違いない。

なお、本書に対する書評として有馬卓也氏の「出土資料研究―次のステップへ」（『東方』第三〇四号、東方書店、二〇〇六年六月）がある。

『中国古文献与戦国文字研究』（出土文献訳注研析叢書P023、福田哲之著、佐藤将之・王綉雯合訳、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇五年十一月、二三四頁、横組繁体字）

中国古文字学研究の専門家による中国出土古文献と戦国文字についての研究書。全八章からなり、大きく四部に分けられる。第一部分には阜陽漢簡『蒼頡篇』に関する論考二篇、第二部分には阜陽漢墓木牘・定州漢墓竹簡『儒家者言』に関する論考二篇、第三部分には郭店楚簡・上博楚簡に関する論考二篇、第四部分には戦国簡牘文字に関する論考二篇を掲載している。

第一部分「阜陽漢簡『蒼頡篇』研究」では、第一章「阜陽漢簡『蒼頡篇』之文献特性—与秦本之関係」、第二章「『蒼頡篇』之内容与結構」の二篇を掲載している。

第二部分「阜陽漢墓木牘与定州漢墓竹簡『儒家者言』研究」では、第三章「阜陽漢墓木牘出土木牘章題考—以一号・二号木牘為中心—」、第四章「阜陽漢墓一号木牘章題与定州漢墓竹簡『儒家者言』—与『新序』『説苑』『孔子家語』之関係」の二篇を掲載している。

第三部分「郭店楚簡・上博楚簡研究」では、第五章「郭店楚簡〈語叢三〉之再検討」、第六章「上博楚簡〈中弓〉与《論語・子路》篇「仲弓為季氏宰」章」の二篇を掲載している。

第四部分「戦国簡牘文字研究」では、第七章「戦国簡牘文字之両種様式」、第八章「関於戦国楚墓文字的幾個問題:楚墓出土簡牘文字之形体様貌」の二篇を掲載している。

本書掲載の論文は、日本国内で刊行された学術雑誌や研究書にて既に発表されたものを中国語訳したものであり、原出は「訳者跋」に記されている。

筆者は、「戦国楚簡研究会」の一員であり、新出土資料を文字学の観点から研究している数少ない日本人研究者である。その成果が中国語によって刊行されたことは、国内外での戦国楚簡研究にとって大変大きな意義がある。

『戦国楚簡与秦簡之思想史研究』（出土文献訳注研析叢書Ｐ０２４、湯浅邦弘著、佐藤将之監訳、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇六年六月、二七六頁、横組繁体字）

新出土資料である戦国楚簡（郭店楚簡・上博楚簡）と秦簡（睡虎地秦墓竹簡）とに関する研究書。全十章からなり、大きく四部に分けられる。第一部分には総論一篇、第二部分には郭店楚簡に関する論考二篇、第三部分には上博楚簡に関する論考五篇、第四部分には睡虎地秦墓竹簡に関する論考二篇を掲載している。

第一部分「総論」第一章「戦国楚簡与中国古代思想史研究」では、まず第一節で郭店楚簡・上博楚簡の基本情報を明記する。第二節では、戦国楚簡研究の展開を概略している。第三節では、日本における研究状況を概略している。戦国楚簡の発見から現在に至るまでの研究状況を網羅しているため、戦国楚簡の研究者はもちろんのこと、初心者にとっても研究状況を把握しやすい内容となっている。

第二部分「郭店楚簡研究」では、第二章「〈魯穆公問子思〉与先秦的「忠臣」思想」、第三章「〈六徳〉之全体結構及其著作目的」の二篇を掲載している。

第三部分「上博楚簡研究」では、第四章「〈従政〉的竹簡連接与分節」、第五章「〈従政〉与儒家的「従政」」、第六章「〈彭祖〉中的「長生」思想」、第七章「〈昭王毀室〉中的父母合葬」、「代代相伝的先王故事――〈昭王与龔之脽〉的文献性質」の五篇を掲載している。

第四部分「睡虎地秦墓竹簡研究」では、第九章「秦律的理念」、第十章「秦的法思想」の二篇を掲載している。

本書掲載の論文は、日本国内で刊行された学術雑誌や研究書にて既に発表されたものを中国語訳したものであり、原出は「訳者跋」に記されている。

筆者は、「戦国楚簡研究会」の一員であり、新出土資料に関する数々の研究論文を積極的に執筆している。その成果が中国語で刊行されたことは、国内外での出土資料研究の発展に大きく影響するであろう。

『郭店楚簡与先秦学術思想』（郭沂著、上海教育出版社、二〇〇一年二月、八五九頁、横組簡体字）

郭店楚簡と先秦学術思想とに関する総合的な研究書。はじめに「緒論」があり、本論は大きく三巻に分けられる。まず、「緒論」では、郭店楚簡と中国学術思想とに関する総論を掲載している。

第一巻「郭店楚墓竹簡六種考釈」では、『老子』・『太一生水』・『五行』・『成之聞之』・『性自命出』の五文献に対する考釈を掲載し、それぞれ、原文・他の版本との比較・考証・釈義などを掲載している。また、『成之聞之』・『性自命出』については、別の篇題を提案し、さらに『性自命出』は上下二部に分けてそれぞれ別の篇題をつけている。

第二巻「文献与史実」は、四篇からなる。第一篇「孔子与《周易》」は三章からなり、孔子と易とに関する論考を掲載している。第二篇「郭店楚簡与《論語》類文献」は二章からなり、郭店楚簡と『論語』・『孝経』とに関する論考を掲載している。第三篇「郭店楚簡与子思学派及其文献」は五章からなり、郭店楚簡と『礼記』・『中庸』・『子思』・『子思子』・『五行』・『大学』とに関する論考を掲載している。第四篇「郭店楚簡与道家及其文献」は二章からなり、『老子』・『太一生水』に関する論考を掲載している。

第三巻「先秦思想的主流」は五篇からなる。第一篇「夏・商・周的観念世界」は三章からなり、天命鬼神観念・陰陽観念・人文主義思潮に関する論考を掲載している。第二篇「孔子：「下学而上達」」は五章からなり、孔子の学

術使命・礼学・仁学・易学・中庸に関する論考を掲載している。第三篇「思孟学派：上下貫通　内外円融」は三章からなり、『天命』・『大学』・孟子に関する論考を掲載している。第四篇「道家：修身与治国」は三章からなり、老聃・太史儋・関尹に関する論考を掲載している。第五篇「隠逸家：「洸洋自恣以適己」」は三章からなり、中国哲学の中の「自由」の問題や、隠逸家と道家との分野について、さらに荘子に関する論考を掲載している。

また、附録として、「現代化：従科技革命到伝統復興」という論考を掲載している。

以上からもわかるように、郭店楚簡の総論、各文献の詳細な考釈、各文献と伝世文献との比較・考察など、幅広い視野から郭店楚簡と先秦思想とを研究しているために、非常に重厚な研究書となっている。特に、伝世文献との比較を通した考察は、郭店楚簡と先秦学術思想とを研究する上で大変有益である。

『郭店楚簡先秦儒書宏微観』（顧史考（(美) Scott Cook）、台湾学生書局、二〇〇六年六月、二七九頁、縦組繁体字）

郭店楚簡を対象とした研究書。郭店楚簡の中でも儒家系文献に重点を置いている。内容は、「宏観篇」と「微観篇」の二部構成であり、全九章からなる。

「宏観篇」は、郭店楚簡儒家系文献を広い視野から捉え、その思想上及び学術史上の意義を論ずる。特に、「以人治人」の思想・礼楽美学思想・「情義終始論」等の哲学的な課題を追究する。なおかつ、これらの思想の歴史的背景、戦国諸子との関係、後世儒学への影響についても言及している。「宏観篇」の内訳は、以下の通り。一「従礼教与刑罰之弁看先秦書子的詮釈伝統」、二「従楚国竹簡論戦国「民道」思想」、三「郭店楚簡儒家逸書及其対後世儒学思孟道統的意義」、四「以新出楚簡重遊中国古代的詩歌音楽美学」。

「微観篇」は、一転して、釈読上の個別具体的な問題に重点を置き、竹簡の排列順序、章節文句の句読と解釈、及び個々の文字の釈読について言及する。また、出土資料と伝世文献とをどのように照合すべきかの理論についても追究している。「微観篇」の内訳は、以下の通り。五「古今文献与史家之喜新守旧」、六「郭店楚簡儒家逸書的排列調整芻議」、七「読〈尊徳義〉札記」、八「郭店楚簡〈成之〉等篇雑志」、九「従《楚辞》韻例看郭店楚簡〈語叢四〉」。

「宏観篇」・「微観篇」の二篇を合わせて一つの書とするのは、多角的に郭店楚簡儒家系文献の全体を見極めようとする意図による。

『簡帛典籍異文側探』（徐富昌著、国家出版社、二〇〇六年三月、五七二頁、横組繁体字）

簡帛典籍と伝世文献との異文を対照・考察した研究書。全十三章からなり、大きく「緒論篇」・「異文考察篇」・「異文対照篇」・「結語」の四篇に分けられる。ここに言う「異文」とは、一つの書の異なる版本・伝本、あるいは異本間の別字を指す。

「緒論篇」では、異文の原因及び形式についての総論を記載している。各章の題目は以下の通り。一「緒論：典籍異文概説」、二「簡帛典籍異文産生的原因」、三「簡帛典籍与伝世典籍異文現象分析」、四「簡帛典籍在異文考察上的意義—以簡帛本《老子》為核心的説明」。

「異文考察篇」では、出土簡帛典籍と伝世文献との間の各種の異文現象について分析し、そうした現象が発生した理由を示している。各章の題目は以下の通り。五「上博《周易》異文初探—以異体字及通仮字為中心的考察」、六「上博《紂衣》・郭店《緇衣》与今本《緇衣》異文側探—以通仮異文為核心的考察」、七「郭店《老子》与今本《老子》異文側探—以通仮異文為中心」、八「《定州論語》与今本《論語》異文側探」。

「異文対照篇」では、簡帛典籍と伝世文献との間の異文を利用し、校勘・比較を進め、対照表を作り、異文分析の工具書として学界に提供することを主旨としている。各章の題目は以下の通り。九「《上博周易》・《帛書周易》・《阜陽周易》及今本《周易》異文対照」、十「《上博緇衣》・《郭店緇衣》与今本《礼記緇衣》異文対照」、十一「《郭店老子》・《帛甲本老子》・《帛乙本老子》及《王弼本老子》異文対照」、十二「《定州論語》与今本《論語》異文対照」。

「結語」には、十三「出土文献新証与文献考察—兼論異文在文献詮釈中的価値」として、出土文献が示す新たな証拠と文献考察との関係について総述し、併せて異文の文献解釈上の価値を論じている。

出土文献を解読する際、異文に直面した場合には、本書が効力を発揮すると言えよう。

『上博楚簡（一）（二）字詞解詁　上・下』（出土思想文物与文献研究叢書二十二、邱徳修著、台湾古籍出

版有限公司、二〇〇五年十月、総二三〇七頁、縦組繁体字）

『上海博物館蔵戦国楚竹書』第一分冊・第二分冊に収録されている九つの儒家系文献（『孔子詩論』・『紂衣』・『性情論』・『民之父母』・『子羔』・『魯邦大旱』・『従政』・『昔者君老』・『容成氏』）を対象として、それらの文献の「字」・「詞」に対する詳細な解説・論証を行った書。筆画順に一画～二十五画まで、一文一文を短く区切って並べられている。残字巻には、一部が残欠した文字が挙げられている。巻末には、「主要参考書目」・「上博楚簡主要参考論著目録」を附す。

本書の構成は、まず一文を上げ、その下に上博楚簡の各文献の名称を記載する。そして、「整理者云」として、原釈文担当者の案語を表示する。次に、「解詁」として、その字詞の解説・論証を行う。最後に解説した「字」・「詞」を実際に簡文に入れて、その部分の最終的な解釈を導き出している。

なお、巻末には、「上博楚簡主要参考論著目録」（著者筆画順）が掲載されている。この目録を見ると、日本人研究者の論文をも参考にして作成されていることがわかる。

本書は、上下巻にわたる大変重厚な書である。一文一文、詳細な考証を行っているため、この研究成果は今後の上博楚簡研究に大きな役割を果たすことになるであろう。ただし、本書には索引がない。筆者は索引の作成を検討しているようであり、その刊行を期待したい。

『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）研究』（黄人二著、高文出版社、二〇〇五年十一月、二三六頁、横組繁体字）

上博楚簡に関する釈文・研究を収載した書。『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）』（上海古籍出版社、二〇〇二年十二月）に収録された六文献（『民之父母』・『従政』・『魯邦大旱』・『子羔』・『昔者君老』・『容成氏』）を対象としている。全六章からなる。第一章は総論（「戦国楚系出土簡牘概況及研究之三任務」）、第二章は『民之父母』・『従政』の校読、第三章は『魯邦大旱』・『子羔』・『昔者君老』の校読、第四章は『容成氏』の校読と研究論考、第五章は『容成氏』に関する研究論考、第六章は余論として漢学学術研究上の史料問題に関する論考を掲載している。

この内、第二章～第四章では、それぞれの一節において校読を掲載する。各文献についての詳細な説明や釈文・

語釈・附記等を掲載し、さらに頁下段に注を附すという構成である。

また、第四章・第五章では、特に『容成氏』を取り上げた研究論文を計五本掲載しており、『容成氏』を研究するのに大変有益である。

第六章では、余論として「余論—兼及漢学学術研究上的史料問題」を掲載している。

本書は、『上海博物館蔵戦国楚竹書（二）』と比べて、かなり詳細に釈読を行っている。

なお、同じシリーズである『上海博物館蔵戦国楚竹書（一）研究』（黄人二著、高文出版社、二〇〇二年八月、二八三頁、横組繁体字）はすでに刊行されている（提要（二）で解説済み）。

『《上海博物館蔵戦国楚竹書（三）》読本』（出土文献訳注研析叢書P022、季旭昇主編、陳恵玲・連徳栄・李綉玲合撰、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇五年十月、三一三頁、横組・縦組繁体字）

『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）』（上海古籍出版社、二〇〇三年十二月）として公開された文献四篇（『周易』・『仲弓』・『恆先』・『彭祖』）に対する釈文・語釈・注釈を収載した書。

第三分冊の全文献『周易』・『仲弓』・『恆先』・『彭祖』について、各々「題解」（該当文献に対する簡易な解説）、「原文」、「語訳」（現代中国語訳）、「注釈」（伝世文献の類似文章との比較、字形の解説、語句の解説等）を記載している。ただし、『周易』のみ、「題解」、「訳釈」、「注釈」という構成であり、「訳釈」には上博楚簡原文・帛書本原文・現行本原文を併記して対照させている。

巻末には、文字を対照させるために、各文献の竹簡の文字を模写したものと、隷定後の文字とを並べて記載している。

内容的に注目されるのは、『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）』の原釈文と異なる釈読を提示している箇所が見られる点である。各文献の解読の際に、有益な資料となろう。

なお、すでに刊行されているものとして、『《上海博物館蔵戦国楚竹書（一）》読本』（出土文献訳注研析叢書P017、季旭昇主編、陳霖慶・鄭玉姍・鄒濬智合撰、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇四年六月、二七〇頁、横組・縦組繁体字。提要（六）で解説済み）、『《上海博物館蔵戦国楚竹書（二）》読本』（出土文献訳注研析叢書P

０１６、季旭昇主編、陳美蘭・蘇建洲・陳嘉凌合撰、万巻楼図書股份有限公司、二〇〇三年七月、二四六頁、横組・縦組繁体字。提要（二）で解説済み）がある。

『郭店楚簡《老子》釈読』（鄧各泉著、湖南人民出版社、二〇〇五年三月、三九二頁、横組簡体字）

郭店楚簡『老子』甲・乙・丙について、詳細な釈読を掲載している書。「原文」・「釈文」・「釈読」（各字に対する詳細な語釈）・「訂文」（校訂原文）・「訳文」（現代中国語訳）・「随記」（著者による読書ノートや著者の意見を記したもの）を各々掲載している。また、甲・乙・丙の各章が王弼本の何章に該当するかも記載している。巻末には、図版を掲載している。

「原文」では、『郭店楚墓竹簡』（荊門市博物館編、文物出版社、一九九八年五月、二三〇頁、縦組繁体字。提要（一）で解説済み）にある竹簡の図版を電子化して使用しているため、竹簡の文字の画像がそのままの形で掲載されている。各字の下には、隷定後の文字を列挙している。

本書の主体となっているのが「釈読」部分であり、文字の隷定、解釈について、詳細な検討・考察がなされている。その際の比較対照として、帛書本・通行本（河上公本・王弼本）が使用されており、それぞれの原文をも並べて挙げている。郭店楚簡『老子』甲・乙・丙を研究する上で、大変有益な書であると言えよう。

『簡帛文献《五行》箋証』（二十世紀出土簡帛文献校釈及研究叢書、魏啓鵬著、中華書局、二〇〇五年十二月、二八四頁、横組繁体字）

『五行』に関する研究書。郭店楚簡『五行』はもちろん、『五行』との関係で、上博楚簡『孔子詩論』、郭店楚簡『魯穆公問子思』に関する研究も掲載している。上巻・中巻・下巻の三部構成であり、さらに附録がある。

上巻では、「郭店楚簡《五行》箋証」として、最初に郭店楚簡『五行』の説明を記載し、原釈文と箋証とを掲載する。箋証は、原文の一句一句を抜き出して、筆者の案を記載するという形式となっている。

中巻では、「例言」、「序一」、「序二」とあり、続いて「馬王堆帛書《徳行》校釈」、「馬王堆帛書《四行》校釈」、「帛書《徳行》研究札記」を掲載している。（注：馬王堆

帛書『老子』の後には甲本巻後古佚書と総称される四篇があり、それぞれ篇題を欠いていたために整理者によって『五行』・『伊尹』・『明君』・『徳聖』と名付けられたが、著者の魏啓鵬氏は『五行』は『徳行』と、『徳聖』は『四行』とするのがふさわしいと考えており、本書でもその名称を使っている。)

下巻では、「簡帛《五行》直承孔子詩学―読《楚竹書・孔子詩論》劄記」、「論魯穆公変法中的子思―郭店楚簡《魯穆公問子思》及相関問題研究」、「《子思子》輯佚校補」を掲載している。「簡帛《五行》直承孔子詩学―読《楚竹書・孔子詩論》劄記」は、簡帛『五行』と『孔子詩論』との内在的つながりを検討し、孔子の『詩』学が中国古代の思惟方式と言葉とに与えた影響、さらに曾子・子思の「慎独」説が中国の心性の学に与えた影響について考察している。「論魯穆公変法中的子思―郭店楚簡《魯穆公問子思》及相関問題研究」は、『魯穆公問子思』において子思が魯穆公の変法中に提出した思想を検討し、子思が孔門の伝統を伝えながら斉学をも吸収し、一定の法家思想を具えていたことを明らかにしている。「《子思子》輯佚校補」では、輯佚書である『子思子』について、校補を行っている。

また、附録として、『馬王堆漢墓帛書』(文物出版社、一九八〇年三月)所収の『五行』の釈文・図版、『郭店楚墓竹簡』所収の『五行』の図版を掲載している。

本書は、郭店楚簡『五行』と馬王堆帛書『五行』とについて詳細な解釈・考察等がなされており、『五行』を研究する上では欠かせないものと言えよう。なお、『五行』に関する他の研究書として、『簡帛五行解詁』(劉信芳著、芸文印書館、二〇〇〇年十二月、四〇四頁、横組繁体字。提要(四)で解説済み)がある。